

嵯峨天皇の御子はろう者か？

『今鏡』にこのようなことが記入される
(藤波の下：志賀のみそぎ編)

嵯峨の帝の御子に、隠君子と申しける御子は、御み身にいかなることのおはしけるとかや。さて嵯峨に籠り居給ひて、ひきものうちにたれこめて、人にも見え給はで、童にてぞおはしける。このごろならば、法師にぞなり給はまし。昔はかくぞおはしける。心もさとく、いとまおはするままに、よろづの文をひらき見給ひければ、身の御才人にすぐれ給ひておはしましけるに、やんごとなき博士の道をとげ給ひける時、広相の宰相と聞こえける人の、かの博士になり給ひけるに、小屋とかいふ所立ち寄り、とぶらひたてまつらてけるに、難きこと侍りけるをば、駒をはやめて、かの嵯峨にまうでてぞ、問ひたてまつりける。帝の御子にも、かやうなるさまさまおはしけり。

<現代語訳> (竹鼻 績：訳) 講談社より

嵯峨天皇の御子で、隠君子と申し上げた御子は、お体に障害がおりになられたとか。そこで嵯峨に籠居なさせて、帳などの中にとじこもって、人にもおあいなさないで、元服もしないままでいらっしやいました。もし今の世ならば、法師になられるでしょう。昔はこのように隠棲なさいました。聡明で、自由な時間がありになるのにまかせて、万卷の書物をお読みなさったので、御学才も人よりすぐれていらっしやったため、なみなみでないすぐれた博士(菅原道真)が(かつて)方略試を受験されたとき、広相の宰相と呼ばれた人が(すでに)文章博士になられていたときで、(その人が)小屋とかいう試験場に立ち寄って、(道真の)答案のでき具合をおたずねもうしあげなされたときに、むずかしい箇所がございましたのを、(広相が)馬を走らせて、(隠君子のおいでになる)嵯峨に参上して、御質問もうしあげました。天皇の御子にも、このようないろいろな方がいらっしやいました。

※隠君子について

益田勝実氏「心の極北」(『火山列島の思想』)に詳しい。これによれば、『嵯峨の隠君子』と醍醐帝の皇子である『嵯峨の隠君』とは別人で、『嵯峨の隠君子』は、嵯峨帝の皇子の淳王のことであるという。

「今鏡」では、隠君子は身体的障害があって、童形のまま、嵯峨に隠居したとあるが、これは、醍醐帝の皇子の隠君と混同しているようである。隠君子が菅公や橘広相も及ばない碩学であったという話は、『江談抄』(第五・詩事)に類話ある。相違は、「かの博士になり給ひけるに」が『江談抄』には説明がなく、また、「小屋とかいふ所に立ち寄り」を『江談抄』では「不_レ籠_二小屋_一」と書かれてある。

※広相について

橘峯範の子。元慶八年(884年)十二月宰相、寛平二年(890年)五月卒去。貞観六年(864年)八月方略試に及第し、同九年二月に文章博士になり、元慶八

年（884年）文章博士に再任されている。

※嵯峨天皇について

786年～842年。第52代。在位809年～823年。平安初期の天皇。桓武天皇の第2皇子。薬子の乱を処理し、蔵人所・檢非違使などの令外官を設置。漢詩にすぐれ、書道においても三筆の一人。（日本史辞典・昇龍堂出版）

隠君子をろう者であることを否定できないというのが私の所感である。何故かという皇族には近親婚姻も当時は当たり前になっている上、それによる障害者が生まれるわけである。また、その頃は盲人がいて、そのことが書かれてあるし、手足の不自由な皇子もいたという記事が、その頃の書物に載ってあるということで、体に障害があるということは他に何かあるのか。何故、菅原道真氏が隠君子の所に尋ねに行ったのか、文章の達者だからであることは理解できるが、文章が書けるということは彼の障害は目、手足ではないし、又、精神障害者でもないことがわかる。つまり、隠君子は果たして、ろう者なのではないか。隠君子が口でお話しなされた内容も明らかになっていないことと、成人式、結婚も拒否したことを考えてみると、強度の不具者でおられたことは事実であると不思議でもない。当時のつんぼ（聾）、おし（啞）は法華經の教えで「仏（法華經）の悪口を言ったから、障害の子が生まれる」という迷信があり、人々は恐れていたと記録に書かれてある。つまり、当時（奈良、平安時代）は聾、啞は強度の不具であったというから、不自然ではないのであろう。

醍醐天皇の39番目の御子かと記録されているが、菅原道真が関白になられた時、醍醐天皇はまだ、十七歳で隠君子はまだ、生まれていなかったことが明らかになっている。従って、隠君子は嵯峨天皇の御子で名前は何かは焦点であろう。益田勝実氏の「心の極北」によると『紹運録』の嵯峨天皇の所をみると50人の皇子、皇女の並んでいてその中に皇子でありながら、親王にも列せられず、源氏にもならなかったのは淳王だけであったことから、年代的からみても、間違いのないという。いつまでも、童子であったということは社会に参加しておらず、ずっと、嵯峨に籠り、帳などの中にとじこもっていたからであると言っても過言でないと思う。

- 参考文献
- ※今鏡（竹鼻 績：訳）講談社
 - ※「心の極北」『火山列島の思想』益田勝実氏
 - ※日本史辞典・昇龍堂出版
 - ※法華經
 - ※『江談抄』（第五・詩事）

1995年3月6日
文責 那須英彰